

2021年6月11日(金)

老球の細道614号

全会津中体連バスケットボール大会観戦感想

会津バスケットボール協会 室井 富仁

6月8日(火)の朝日新聞朝刊に教師の働き方改革の「本丸」と言われる部活動指導における中学校教員の本音が掲載されていた。見出しが「部活動をしたくて教員になったわけじゃない」。部活動をしたくて教員になった私としては申し訳ない気持ちで読んでみた。

〈彼氏も教師ですが、昨日一緒に寝ていると夜中突然パット起きておかしい様子だったから「どうした?」って聞いたら「明日の部活行きたくない」って泣きながらボロッと一言、試合+審判で、審判の講習も自費。審判のための靴や服、小物まで自費〉

〈まだ中学校教員になって3週間も経ってないけど、正直この1年で辞めようかなって思っている。理由は部活動。学級経営で頭がいっぱいで教材研究もろくに出来ていないのに、放課後休日は部活動って意味もわからん〉

新聞内容のほんの一例である。このような中学校教員の部活動に対する悲痛な叫びを読みながら、わが会津地区の先生方も同じような思いで指導しているのか考えさせられた。かつて会津地区の中学校指導者には3人の伝説コーチがいた。斎藤哲二、鶴川正勝、結城俊弥氏である。私たち高校の指導者が中学校の試合を観戦したり、審判に行ったりしたときなどこの3人の先生たちに熱く色々なご指導を受けた。今は昔である。

今年度はコロナ禍でありながら幸運にも中体連は開催された。観戦するため「健康チェック表」を持参し8日、9日とあいづ体育館に行った。無観客試合であったために体育館は閑散としていたが、コート内の熱気は相変わらずである。他人事ながらいまだに血が騒ぐ。

現在の会津地区の中学生世代はミニ時代に男女とも県大会優勝やベスト4に入賞している世代なので、その後どのくらい成長しているかが楽しみであった。全試合見たわけではないが、例年になく好素材、ビックマンがたくさんいた。これらの中学生が今後も順調に伸びて地元の高校に進学し、かつての若松商業男子のような地産地消の強豪チームがたくさん育ってほしいと思う。外に出なくとも地元高校には優秀な指導者がたくさんいる。

今大会の感想は以前から感じていたことと変わらない。バスケットボールは5人のチームプレイである。1:1の個人技、タレント選手の1:1だけではなく、5人の組織プレイを構築してほしい。また、オフェンスにおいては状況判断を養うような練習を心がけて、自分勝手にプレイするのではなくディフェンスの状況に応じてプレイできるようにする。そして最後にコーチにお願いである。できるだけたくさんの選手をゲームに出してほしい。選手はゲームで自信をつけ、さらにやる気を出す。

中学校における部活動指導の環境はますます厳しくなると思う。文部科学省は外部指導者活用の方針を打ち出しているがスムーズに進んでいるとは思えない。選手、生徒にとってはなんと言っても身近にいる「おらが先生」が一番である。先生たちが余裕ある環境の中で情熱を持って指導できる体制ができないだろうかとつくづく思う。